

Newsletter Citizen's eyes vol.26

2022年10月16日発行／ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま

連絡先 ☎ 090-4680-6336 <https://civic-journalism.wixsite.com/mysite>

市議会議員選挙に参考になる選挙報道を望む

市議会議員選挙レベルの選挙報道となると、その市において何が政治課題で、政党や候補者ごとにどのような政治争点があるのかなどの、投票の際に参考にできる、十分な報道が行われているとは思えない。立候補者の名前とアピールが載っているいわゆる選挙公報だけが選挙の際の参考資料か。各候補の名前を連呼するぐらいの代わりばえのない選挙運動。このような中で誰を選べばいいのだろう。市議会議員選挙レベルでも参考資料になる十分な選挙報道が必要と、ヒシヒシと感じた黒部市議会選挙投票日一日前となった。(黒部市民・お)

今年の記念講演会に MBS のディレクター齊加尚代さんをお呼びすることが決まったこともあり、9月の例会で齊加さんの著書「何が記者を殺すのか」(集英社新書)をテキストに学習会を持ちました。

「何が記者を殺すのか」 ワンポイント学習会を終えて

田尻 繁

私は9月25日のジャーナリズムを考える市民連絡会とやま例会のワンポイント学習会において、齊加尚代さん著の集英社新書「何が記者を殺すのか—大阪発ドキュメンタリーの現場から」を要約して報告した。

体制を批判する市民、学者、弁護士などに対する SNS によるデマ・バッシング・誹謗中傷の拡散と暴走の現況がくわしく述べられた内容だ。そしてその発信源や拡散の過程に政治家が深く関与していることも述べられている。国会議員の大西英男、長尾敬、杉田水脈、橋本岳、菅義偉、安倍晋三(いずれも自民党)、首長の橋下徹、松井一郎、吉村洋文、松浦正人(元山口県防府市長:教育再生首長会議初代会長)などなどだ。齊加さんは「政治の劣化」を訴える。そして劣化した政治家と結託したジャーナリスト田崎史郎を指弾し、田崎を重用する多くのテレビの情報番組が政治の劣化と暴走に加担していることになると、懸念している。

さらに齊加さんはこう指摘する。「一人ひとりが自分のメディアと拡声器をもつネット時代には、誹謗中傷がどんどん拡張の一途をたどる…。デマは30秒あれば簡単に作れて発信できる…」「…『デマを誤信する』人は後を絶たない。その背後には政治勢力が存在する」と。

ワンポイント学習会を終え、富山県に暮らす私たちはまず富山県政治家と富山県のメディアとを監視せねばならない、と考えた。自身が劣化しないためには学び続けるしかない。

本間 啓子

安倍政権の下、報道への「圧力」が強まり「萎縮」の空気が社会全体に蔓延し、その上、SNSを使ったバッシング(誹謗・中傷)が増える中、齊加さんの取材・報道姿勢に深い感動を覚えた。空気を読まず、自らの信念を通す齊加さんのようなジャーナリストの存在に、まだまだ、「日本は捨てたものではない」という気分を持つことができ、心強い。

著書で印象深かったのは、沖縄タイムスの編集長へのインタビュー記事。米軍の施政権下、絶対的な権力者と基本的人権すらも守られていない人々。力の不均衡がある以上、弱者に肩入れし、声を代弁することこそメディアの責任、あるべき姿という主旨のはなし。

学習会のレジュメを多大な労力を使って作成していただいた田尻さんに感謝。

／この本の中で興味深かった一つが「おわりに」に掲載されていた21年に行われたMBSの報道局が報道情報局に改組された時に、危機感を感じた斉加さんから同社の記者、ディレクターへ送った一斉メールがそのま



ま載っている部分だ。そこには、同僚の記者、ディレクターに問いかけた報道とは何かについて真摯に書かれ文章が載っていて、それは、MBSにとどまらず、全国の放送局の報道人にも投げかけた文にもなっていると思う。そのほんの一部を紹介。「理念なきものは報道といえない…」「(コロナ禍の中) 人々とともに共感共苦して社会や政治を検証することが報道の大きな役割です。…」／テレビジャーナリズムを諦めない斉加さんの講演をぜひ聞きに来て下さい。(大島)

ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま
結成3周年記念講演会

演題：「何が記者を殺すのか」

講師：斉加尚代さん (MBS ディレクター)

日時：12月4日(日) 14時～16時

会場：サンフォルテ2階ホール

参加費：1000円 中高生無料

主催：ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま

問合せ：☎090-4680-6336

「科学と宗教と死」を読んで

甲田 克志

著者の加賀乙彦は29年生まれの93歳。精神科医でもあり、死刑囚の心理研究をテーマにしている。東京拘置所の医官となり、約2000人の囚人と日々接した。死刑囚と無期囚の違いは、「濃密な生」と「希薄な生」という差で歴然とする。明日殺されるかもしれないという切迫感が駆り立てる死刑囚の日々。一方無期囚の一番の敵は退屈で、毎日毎日判で押したような日々が続く、それがいつまで続くかわからない。無感動で、長い刑務所暮らしに適応していく。

さて、後期高齢者となった同世代に聞きたい。誰にも死は必ずやってくる。あなたは死刑囚か、それとも無期囚か。退屈な日々を漫然と送っていれば無期囚で、ガン末期で余命宣告を受けて初めて死刑囚ということになるのかな、と友人。思えば、わが世代は成り行き任せで、死というものを考えないように生きてきた。「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」という詠嘆にうなずく。戦後教育で最も欠けていたのは宗教に対する向き合い方。大震災でも「頑張ろう」という掛け声だけで、天変地異を恐れ、祈ろうとしても祈る言葉を持っていなかった。このままでは、のっぺりとした死が待ち受けているように思える。眼前に立っている死とは何なのか。できれば、あと数年で悟りに近いものを会得してみたい。そう思うようになった。

加賀乙彦は、58歳の時に遠藤周作に唆されてカトリックの洗礼を受けている。神父と4日間真剣な質疑を交わした。もう神に対する疑いが出てこない瞬間が訪れ、澄み切った明るい光に満たされ、沸き起こる喜びを感じることができたという。神の啓示だが、おいそれとはやってこないだろう。

わが企みだが、坊主バーを開きたい。80年代に千石イエスが話題となったが、後期高齢の善男善女が集うバーで、車いす対応のトイレも完備している。一緒に読経し、感涙を流し、法悦の境地に入る。統一教会でスッカラカンになった御仁も大歓迎である。

ところで、黄泉の国で遊ぶアベクンは何を思っているだろうか。俺の演技を真に受けて、売国奴を愛国者に仕立てあげてくれたのはありがたい。権力を握り続けるということは悪魔とも手を握るということ。山上君には感謝している。虚飾の日々にいっぱいいっぱい苦しかった。まかり間違えたら、獄門打ち首の俺が、国葬となるんだから、甘い国民のみなさん、ありがとう。

参照図書／「科学と宗教と死」(集英社新書)

《コラム》 沖縄のいま(18)

MV22 オスプレイ 普天間基地配備から 10 年

小原悦子

◇オスプレイの飛行拡大◇

前回、米空軍 CV22 オスプレイが飛行停止になり、陸自の V22 オスプレイも同様の措置が取られたが、普天間基地所属の米海兵隊 MV22 オスプレイは飛行停止されず運用続行している、と書いた。飛行停止の理由はエンジンとプロペラをつなぐクラッチの不具合が原因で事故につながる可能性があるとのことだった。海兵隊は 2010 年には同様の不具合を把握していたことも明らかになっていた。

9 月 2 日、米空軍は問題が発生した場合に対処できるようパイロットを訓練するとして飛行を再開した。構造的な不具合は解決されないままだ。陸自の V22 も再開となった。何事もなかったかのようにオスプレイの運用は続いている。それどころか、運用は拡大している。

防衛省は 9 月 27 日～10 月 18 日の間、普天間基地所属 MV22 オスプレイが沖縄県外の国内の山岳地帯で地上 90 呎（30 メートル）での低空飛行訓練を実施することに合意した。果たして、その期間限定が守られるのだろうか。安全は担保できるのだろうか。以前、黒四ダム周辺で米戦闘機の低空飛行が目撃された。オスプレイを含む軍用機の低空飛行が常態化することを懸念する。

吉田圭秀陸上幕僚長は 9 月 29 日、陸自 V22 オスプレイが沖縄・南西諸島周辺で訓練する可能性に言及した。「地元の詳細が得られたら」と前置きしているが、南西諸島での陸自ミサイル基地建設や部隊配備は地元の了解が十分得られたとは言えない状態で強行されている。

10 月 1 日から 14 日の間、北海道の矢野別や上富良野などの陸上自衛隊演習場において日米共同訓練「レゾリュート・ドラゴン 22」が実施されている。昨年 12 月にも、東北と北海道で同様の訓練が実施された。約 3500 人が参加し、北海道内の演習場を島嶼に見立て、陸自の領域横断作戦と米海兵隊の遠征前方基地作戦（EABO）の連携を図る実動訓練とのこと。高機動

ロケット砲システム「ハイマース」の射撃訓練や MV22 オスプレイによる陸自隊員の輸送なども実施するという。海兵隊が沖縄で行う訓練を移転し、地元負担を軽減する取り組みの 1 つでもあるとされる。

米国の対中国戦略に自衛隊が組み込まれ、「日米共同作戦計画」が策定されると共同通信の石井暁専任編集委員がスクープしたのは昨年 12 月。「台湾有事」の拠点として戦場化が懸念されるのが沖縄・南西諸島の島々だ。ミサイル配備や軍事力強化が、平和で豊かな沖縄につながるとは思えない。日本復帰 50 年の今、「二度と再び沖縄を戦場にさせない」との沖縄県民の切実な思いを共有したい。

◇ 10 年前の 9 月 30 日 ◇

10 月 1 日で、普天間基地に MV22 オスプレイが強硬配備されて 10 年が経った。当時の沖縄県民の「オスプレイ配備阻止」の抗議活動がよみがえる。2012 年 9 月 9 日の県民大会から翌年 1 月の県議会と県下 41 市町村代表らによる「建白書」を携えての東京要請行動が、「オール沖縄」をつくりあげた。

2012 年 9 月 27 日からの 4 日間、オスプレイ配備を阻止しようと普天間基地の三つのゲートを封鎖した県民とそれを解除しようとする県警が対峙するという、異常な事態になった。大型台風のさなか、県民らは自らの車を基地ゲート前に並べて普天間基地を封鎖した。9 月 30 日午後、普天間基地大山ゲート前に座り込んでいた県民はごぼう抜きで排除された。メディアも誰もがもみくちゃだった。排除された県民は県警の大型バスと機動隊の壁に囲い込まれた。その後、ゲート前に並べた県民の車を県警がレッカー移動し始めたとき、車中に残っていた女性は日米両政府への抗議を「安里屋ユンタ」の歌に込め、全身から絞り出す声で歌った。＜沖縄は日米の思い通りにはならないよ！沖縄は沖縄の意思で生き抜く

よ！＞。そんなふうに、私には聞こえた。大山ゲートでの攻防の後、野嵩ゲートでの県民の闘いは夜の11時過ぎまで続いた。そして翌日、オスプレイは岩国基地から普天間基地へ飛行してきた。沖縄県民の長〜い闘いは続いている。

◇「土地規制法」全面施行◇

「重要施設周辺及び国境離島等における土地等の利用状況の調査及び利用の規制等に関する法律」（「土地規制法」）が9月20日全面施行された。基本方針案にパブリックコメントが全国から2760件寄せられたが、まったく考慮されなかった。年末にかけて、「注視区域」や「特別注視区域」の指定がなされるという。

米軍基地が集中し、宮古・石垣・与那国の島々に自衛隊基地が新たに造られ（北大東島にも空自の移

動レーダー基地設置予定）、国境の島嶼県である沖縄は、全国で最も影響を受けることは確実だ。

国会の法案審議では、そもそも立法事実がないこと、法律の条文に調査に関する縛りがなく、市民が私権制限を受ける可能性があること、罰則があるにもかかわらず「機能阻害行為」についての規定が条文にないこと等々、多くの問題点が指摘されていた。

沖縄では有志による「土地規制法の廃止を求める沖縄県民有志の会」が結成され、9月20日、同法の廃止を求める意見書を内閣総理大臣、法務大臣、防衛大臣等に送付した。名護市、今帰仁村、読谷村の議会は同法の即時廃止を求める意見書を可決している。

基地監視や抗議の権利を侵害し、本人の知らない間に個人情報の収集が行われる悪法だと思えない。ドローン規制法同様、指定範囲は随時拡大されるだろうと危惧する。（2022-10-7）

NHK 富山にも、公平な放送を求めよう

七澤 京一

9月27日、安倍元首相の国葬が終わった夕方、NHK富山が、ニュースの時間に国葬に関する県民への賛否インタビュー結果を映像で流していました。

賛成意見ばかりで、反対意見の映像がありません。思わず怒りが沸き、初めてNHKに以下の抗議メールを発信しました。

9/27 夕方のテレビニュースで、国葬に関する賛否について、富山駅前と思われるところでの県民の意見インタビューを紹介していましたが、賛成意見のみで反対意見の紹介がありませんでした。世論調査より、反対意見があることは明確であり、県民の意見を拾い上げていない不適切なインタビューだったと感じました。

母は「富山県には反対している人はおらんがやね」と言っていました。

まさか、恣意的な回答者の選択・編集は行われていないと思います。

限られた時間、限られた回答者に頼らざるを得ないインタビュー活動とは思いますが、適切なインタビューの実施、そして適切な編集による本当の県民の声を、公共放送の役割を強く認識し、放送してください。

今回の国葬問題において、大きく世論が動いたのは、マスコミの影響が大です。特に、年配者はNHK放送を見る機会が多く、放送内容に大きく影響されます。

今後危惧される防衛費の増大、改憲強行等について、国民が正しい判断を行うには公平な情報が必須です。新聞社だけでなく、テレビ放送局にも公平性を求めていくことが大切だと思います。

県民のためのマスコミを求めて、1人でも多くの声を届けましょう！

ジャーナリズムの大切さを知るものとして。

参考：NHK富山への意見メール欄

[NHK 富山放送局 | ご意見お問い合わせ](https://www.nhk.or.jp/toyama/contact)

<https://www.nhk.or.jp/toyama/contact>

※なお、NHKからの回答が9月30日届いた。当回答は市民連絡会とやまのホームページに掲載予定